

5) *Soliva sessilis* RUIZ et PAV. Prodr., Peruv. (1794) p. 113 t. 24; DC., Prodr. VI (1837) p. 143; MART. Fl., Bras. VI III (1884) 294 t. 81.

NOM. JAP. MERIKENTOKINSO (nov.)

Hab. Hondo: Prov. Kii: Nishimurogun, Susami (2 XI 1930 S. SAKAGUCHI) introd.

これは南亞米利加の原産である。メリケントキンサウの和名をつける。果實の形が頗る變つてゐる、鳥が飛んでゐる様な姿で面白い、誰か知らんがよく運んでくれたものだ。

6) *Aster uovi-belgii* L., Sp. Pl. (1753) p. 877; BRITTON & BROWN, Ill. Fl. N. States & Canada ed. 2 III (1913) p. 421 fig. 4320; BONNIER, Fl. compl. France, Suisse et Belgique V p. 73 Pl. 278.

NOM. JAP. MERIKENKONGIKU (nov.)

Hab. Yezo: Prov. Nemuro: Nishiwada propæ Nemuro (10-11 IX 1931 J. OHWAI), Prov. Oshima: (H. SATO).

北亞米利加原産の一丈シツクな植物である。メリケンコンギクと名附ける。歐洲には既に十八世紀以來入り込み佛蘭西では Aster de la Nouvelle-Belgique, 英國では New-York-starwort, 獨逸では Neubelgienaster とか Herbstaster とか Herbst-Sternblume, 亞米利加では New York Aster と云ふ。

7) *Aster subulatus* MICHX. Fl. Por. Amer. II (1820) p. 111; BRITTON & BROWN, Ill. Fl. N. States & Canada ed. 2 III (1913) p. 433 fig. 4356; YAMAMOTO, in Bot. Mag. Tokyo (1926) p. 31; MAKINO, in Journ. Jap. Bot. III (1926) p. 32.

NOM. JAP. HAHAKIGIKU (簪菊) (YAMAMOTO), HÔKI-GIKU (MAKINO).

Hab: Formosa: Prov. Shinchiku: Chūrekigun, Chureki (VIII 1931 Y. SHIMADA n. 4350 B.)

ハハキギクは大正十五年牧野博士、山本由松氏により前後して報ぜられた北米原産の植物である。島田彌市氏は臺灣にこの植物を採集された。内地では其の後なかなかの發展で鹽田健藏氏は昭和五年十月十五日美濃多治見町で採集され杉野辰雄氏は昭和四年九月二十五日肥後長洲海岸で發見、鍋島與市氏は筑前二日市、小生は近江堅田で五年來自生してゐるのを見てゐる。簪菊は牧野氏の命名ださうである。

## 大陸の植物採集旅行に必要な旅装と 輕便なる腊葉乾燥法の紹介

石戸谷 勉

滿洲、蒙古等の大陸の學術探險隊に植物調査班員として参加するときには少くと

も一日に六里乃至十里の荒野を歩み、探險隊長の指揮、警備隊長の指示のもとに行進しながら各自専門の學術資料の蒐集に従事せなければならない故に、その旅装たるや輕快にして然も用意周到のものでなければならない。又その携帶の荷物は人脊又は馱馬に積みよき形態に整理さるべきものでなければならない。この要求から私は先學の示されたる第一圖に示す如き野冊、胴亂、壓搾器、鋏、根掘等の身體に帶着の頗る悪き諸具を捨て、第二圖に示す如き輕便なる旅装にて調査旅行に参加することにしてゐる。この石戸谷式採集旅装の特徴は植物標本の採取と乾燥、荷造に必要な諸具は壹個の脊囊<sup>ル・クサツク</sup>に收容されることにある。即ち第三圖に示す如く脊囊の中には壹個の採草「バック」、八枚の乾燥袋と壹本の萬能鎌を收め、乾燥袋には各々に三十枚の新聞紙を入れて置く。乾燥袋は支那麻又は朝鮮麻の硬く、布目の粗きものにて造り、縦壹尺四寸五分、横壹尺壹寸とし、上方に口を開き、その一角に二寸許の紐を附しておく、即ち新聞紙の壹面の二つ折を收むるに適當なる大きさとする、採草「バック」は寫眞に見る如く、縦壹尺壹寸、横壹尺四寸五分とし、乾燥袋と同様の布地を用ゐる、萬能鎌は小形の桑刈鎌に稍長き紐を附したるもので、採集に當り掘取り、切りとりの勤めをする。

第一圖



大陸の跋涉に不適當なる在來式の植物採集家の旅装

第二圖



大陸の探險に必要なる輕快にして利便なる旅装

第三圖



脊囊とその内に收められたる採集、乾燥用器

第四圖



E. H. WILSON 氏の用ひたる腊葉乾燥柵板

調査隊は單に目的地へ行軍するときには之等の諸具を背囊に收めて負ひ、歩行を輕快にする。調査地區に入り、之より採集を開始せんとするときにあたり脊囊より採草「バック」と萬能鎌をとり出し、左手に「バック」を持つ、鎌の紐は遺失を防ぐ用心に左の負草の金輪に結びつけ、鎌は採草「バック」の一隅に納めて置く。研究の資料は出来る丈多量に採集し「バック」に收め、調査隊は休憩の時を利用し、之を乾燥袋の中の新聞紙に整理し、それを乾燥袋に收め、再び背囊に收める。集めたる標本は出来る丈早く乾燥することに努めなければならない故に調査隊は行軍中一時間餘を休憩する場合又は野營の時には乾燥袋を日當りよき岩石、砂原にならべ、又は林間に繩を張りて、袋の一角にある紐により張り繩に懸けて乾すことに努める、斯くして出来るだけ日光と乾風を利用せば通常二三日にて標本は乾く故に、その仕上りの標本は乾燥袋のまま、十個づゝ梱包して駄馬隊の方に運搬を依頼する。

この方法によりて出来上りたる標本は壓搾板を用ひたるものに比し著るしく皺は多いだらうと云ふ人もあるが腊葉標本を石塊又は壓搾板にはさみて紙片の如く平たく壓つぶして仕上ぐることはあまり好ましくない事である。それは標本の重要な果實、花、葉肉等の構造を破壊し、後で原形に復し、解剖検査することは不能の場

合が多いからである。私は常にこの方法により旅行中標本を作つてゐるが適當の厚さを有する特に自然の形を損ぜない氣持よき標本が出来上つてゐる。

この乾燥袋に麻の布地を選みた理由は風通しはよく、吸水少く、硬く、軽く、荷造りに便にして、價は廉しいからで、通常壹個貳拾五錢位で出来る。數十日に渉る旅行にはこの乾燥袋を壹口八枚の割に用意する。さきに朝鮮に來られたる、今は亡き人の E. H. WILSON 氏は第四圖に示す如き柵板を乾燥用に用ゐられてゐたが、この品物は荷造と運搬に荷容となり、長途の旅行には不適の品である。私はこれを研究室に持歸りたる標本の乾燥に利用してゐる。私の考案になる以上の方法は在來の因襲にとらはれ、植物の標本は必ず「ブリキ」の胴亂に收容し、壓搾板にかけて壓しつぶさなければ満足出来ない潔癖家にはすゝめ兼ねるが、滿蒙の大地を跋涉し、大に資料を蒐集せんとする勇敢なる若き學徒たちに切にその採用を希望するものである。

## 新 著 抄 録

故矢部吉禎氏：カハノリの有性生殖 (Y. YABE:—On the sexual Reproduction of *Prasiola japonica* YATAB. Sci. Rept. Tokyo Bunrika Daigaku, Sec. B. no. 3; 1932. p. p. 1—4, t. 1).

カハノリ (*Prasiola japonica*) は下野、上野、駿河、美濃、肥後等の河川の上流、清冽なる急流の岩上に生じ、長さ 10—20 cm. 以上にも達する、葉狀の綠藻にして、カハノリ科 (*Prasiolaceae*, 又は *Blastophoraceae*) の一科をなし唯カハノリ屬の一屬を以て成れり、世界に若干種ありて或ものは頗る多形的の性質を示す。

カハノリ科は綠藻の *Ulotrichales* 目中には *Thallus* が、うすい葉狀體をなし、色素體は星狀にして四個づゝ一群をなせる各細胞の中心部に位置すると游走子を生ぜざるを以て極て特色あるものなり。

本科のものは從來無性生殖の外知られざりしが、著者は日光大谷川産のカハノリに就き其有性生殖あるを明にせり、大谷川にては六月の終頃より該藻現れ十一月まで生育するが、長さ 10 cm. 位に達すれば生殖作用をはじめて漸次枯死し翌年の三月になれば一時皆其影を没するに到る。

即ちカハノリは雌雄兩性にして、*frond* を成す或る部分の各細胞は縦横に分裂して16個の *Macrogametes* を生じ、他の部分の細胞群は同く64個の *Microgametes* となる、兩 *Gametes* は勿論二本の等長の鞭毛を有す、接合子は長い間休眠して七月